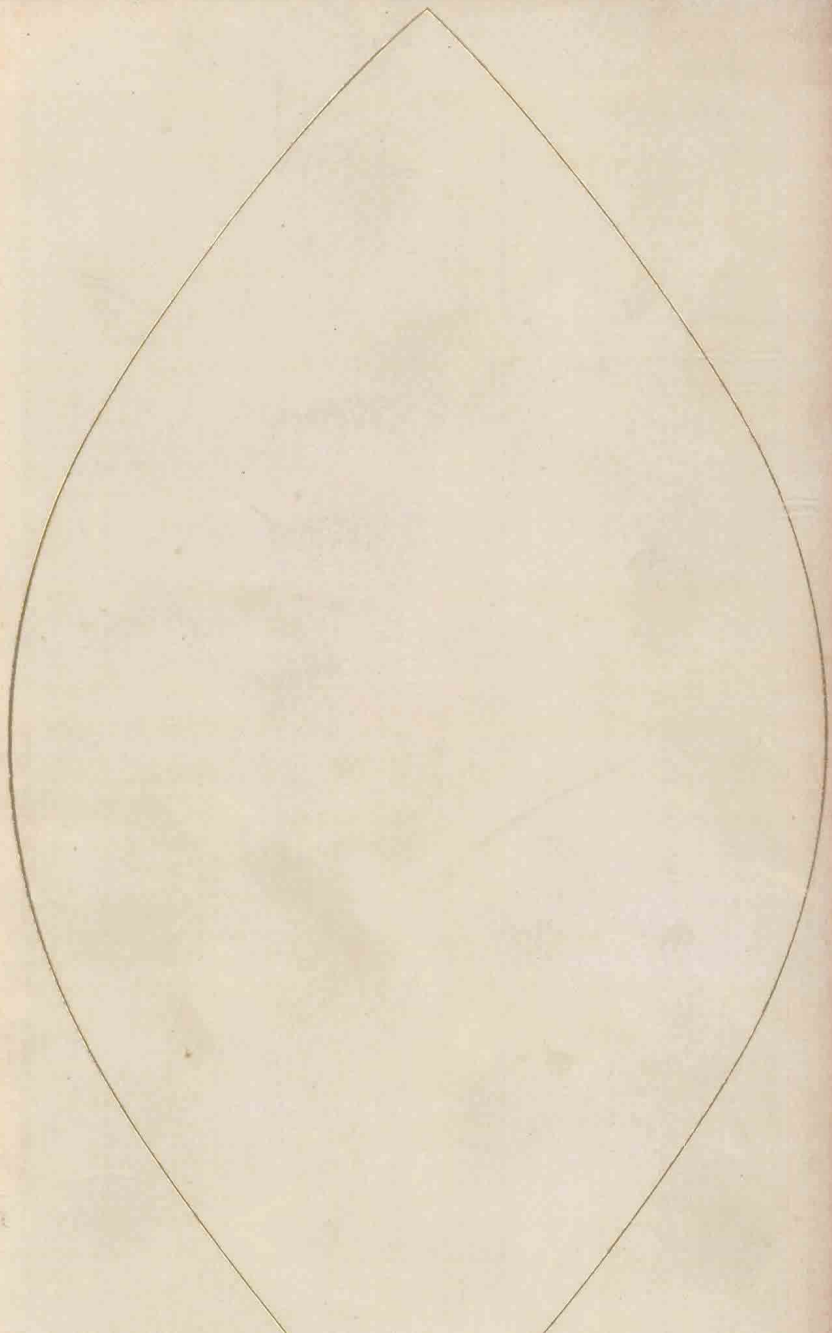
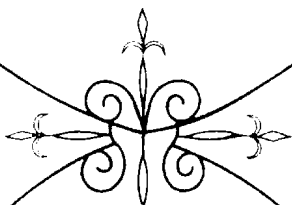




三島由紀夫全集



13

XIII

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第十三卷

昭和四十八年十月二十日印刷

昭和四十八年十月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(〇三)二六〇一一一 振替 東京八〇八

定価 二五〇〇円

第六回配本(全35巻・補巻1) 落丁本・乱丁本はお取替いたします

Copyright © 1973 YOKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第十三卷 目次

宴のあと		七
憂　　國		三三
獸の戯れ		二五
苺		四〇九
帽子の花		四元
魔法瓶		四四三
月		四七一
葡萄パン		四九五
眞　　珠		五九
雨のなかの噴水		五七
切　　符		五二
解題		五七五
校訂		五八二

三島由紀夫全集 第十三卷 小説 (13)

宴 の あ と

第一章 雪後庵

雪後庵は起伏の多い小石川界限の高臺にあつて、幸ひに戦災を免かれた。三千坪に及ぶ名高い小堀遠州流の名園と共に、京都のとある名刹から移された中雀門も、奈良の古い寺をそのまま移した玄關や客殿も、あとに建てられた大廣間も、何一つ損なはれてゐなかつた。

戦後の財産税さわぎの只中に、雪後庵は元の持主の實業家の茶人の手から、美しい元氣な女主人の手に渡つて、たちまち名高い料理屋になつた。

この女主人の名を福澤かづといふ。かづは豊麗な姿のうちに一脈の野趣があつて、いつも力と情熱にあふれてゐた。入りくんだ心の動きをする人は、かづの前へ出ると自分の複雑さを恥ぢ、氣力の萎えた人は、かづを見れば、大そう鼓舞されるか、却つて打ちのめされるやうな氣になるかした。何か天の恵みによつて、男性的な果斷と女性的な盲ら滅法の情熱とを一身に兼ねそなへたかういふ女は、男よりもつと遠くまで行くことができるのだ。

かづの性格はすみずみまで明るく、決して屈することを知らない自我は、單純な美しい形をし

てゐた。若いころから、愛されることよりも、愛することのほうが好きだつた。無邪氣な野趣が、多少の押しつけがましさを隠し、周囲のちつぽけな人間のいろんな惡意が、野放圖もない素直な心をますます育てた。

かづには古くから、色戀ぬきの男の友人が何人かあつた。保守黨の黒幕政治家である永山元龜^{げんき}は、むしろ新らしい友人だつたが、二十歳も年下のかづを、妹のやうに愛してゐた。

「あいつは稀に見る女傑だよ」といつも言つてゐた。「あいつは今にえらいことをやるだらう。日本を引つくりかへせといへば、それもやりかねない。男なら風雲児と云はれるところを、女だからやり手と云はれるくらゐですんでしまふ。誰かあいつから本當の色氣を引きずりだす男があらはれたら、そのときこそあの女は爆發するだらう」

かづは元龜の言葉を入づてにきくと悪い氣がしなかつたが、元龜と面と向つては、こんな風に言ふのであつた。

「永山さんぢや私の色氣なんか引き出せやしませんよ。自信たつぷりで強く來られたつて私はだめなんです。あなたは人を見る目は十分お持ちだけれど、口説き方はなつちやるませんね」

「お前を口説かうとは思はんよ。お前を口説くやうになつたら、わしもおしまひだね」

と老政治家は憎まれ口をきいた。

雪後庵がはやるにつれて、庭の手入れには十分な費用がかけられた。客殿の中書院から眞南に、巽^{たつみ}の池があつて、月見の宴には、この池が庭の大事な點景になつた。庭のぐるりは、東京でもめつたに見られない古い壯大な樹々に圍まれてゐた。松や栗や榎や椎の一本一本がおごそかな姿で

そそり立ち、そのあひだにのぞかれる青空には、何ら邪魔な都會の構築物が顔を出してゐなかつた。ひときは秀でた松の梢に、番^{つが}ひの鳶^{とび}が久しく住みならへてゐた。あらゆる種類の鳥が、折にふれてこの庭を訪れたが、わけても渡りの時節に、南天桐の實やひろい芝生の蟲を啄^{つば}みに來ていちめんに下り立つ鳥の、夥^{おほ}しさとさわがしさは比べるものがなかつた。

朝毎にかづは庭を散歩して、その都度、庭師に何かと注意を與へた。注意は當つてゐるものもあれば、當つてゐないのもあつた。ただ注意を與へることが日課になつてゐて、彼女の上機嫌の一部だつた。だから老練な庭師も、敢て逆らふことをしなかつた。

かづが庭を歩く。これは一人身であることの完全な愉快で、自由な默想の機會だつた。日もすがらほとんど喋つたり、唄つたりしてゐて、一人きりになることがなかつたし、客の應接はいくら馴れてゐても疲労を呼び起した。朝の散歩こそ、もう色戀に大して打ち込む氣の起らない心の平靜の證^{あかし}しだつた。

戀はもう私の生活を擾さない、……かづは靄^{かげ}のかかつた木の間からさし入る莊嚴な日ざしが、徑のゆくでの縁苔を、あらたかにかがやかすのを見ながら、かういふ確信にうつとりした。彼女が色戀と離れてしまつてからもう久しかつた。すでに最後の戀もとほい記憶になり、自分があらゆる危険な情念に對して安全だといふ感じは動かしがたいものになつた。

こんな朝の散歩は、かづの安全性の詩だつたのである。年は五十あまりだが、美しい肌と輝く目を保つた身ぎれいな女が、かうして廣い庭の朝をそぞろ歩く風情を見たら、誰しも心を搏たれて、何かの物語を期待するにちがひない。しかし物語は終り、詩は死んだことを、誰よりも知つ

てゐるのはかづ自身である。もちろんかづは自分の裡の鬱勃たる力を感じてゐる。同時にその力がすでにたわめられ、御せられて、決して羈絆^{きはん}を脱して走り出したりしないことをよく知つてゐる。

この廣大な庭と家屋敷、銀行預金と有價證券、有力で寛大な政財界の顧客たち、これらのものはかづの老後を十分に保證してゐた。ここまで来ればもう人に憎まれたり蔭口を言はれたりする心配はない。この社會にしっかりと根を張り、みんなに敬重され、高尚な趣味に憂身をやつし、ゆくゆくは適當な後繼を仕立てて、旅行や交際に祝儀袋をまきちらしながら、何不足のない餘生をすごすこともできるのだ。

かづはかういふ考へが心にひろがつて、歩みを滞らせる折ふしには、庭門のほとりの中立^{なかだち}の腰掛に腰を下ろし、綠苔の露地の奥深くを眺め、そこにこぼれる朝の日ざしや、下り立つ鳥のこまやかな動きを眺めた。

ここにゐると電車のひびきも自動車の警笛もまつたくきこえぬ。世界は一幅の静止した繪になつた。どうして一度燃え立つた情念が跡方もなく消えてしまふのか、かづにはその理由がわからない。自分の身を一度たしかに通り返けたものが、どこへ行つてしまつたのかわからない。さまざまなものが蓄積されて人間が大をなし、成長してゆくといふのは嘘のやうに思はれる。人間とはただ雑多なものが流れて通る暗渠であり、くさぐさの車が轍^{わだち}を残してすぎる四辻の贅^{いまだち}にすぎないやうに思はれる。暗渠は朽ち、贅はすりへる。しかし一度はそれも祭の日の四辻であつただ。

もう永いこと、かづは盲目になつた経験がない。何もかもこの庭の朝の眺めのやうに、明澄に見晴らしが利き、すべてがくつきりした輪郭を伴つてよく見え、この世にはあいまいなところがない。人の肚の中も全部見透しのやうに思はれる。もう憚くべきことも、そんなにたんとはない。人が利害のために友を裏切つたときいても、ありがちなことだと思ふし、女に迷つて事業に失敗したときいても、よくあることだと思ふ。ただ自分がそんな目に會はないことだけは確實なのである。

かづは人から色事の相談をもちかけられると、てきばきと巧い指示を與へた。人間心理は數十の抽斗にきちんと分類され、どんな難問にもいくつかの情念の組み合せだけで答が出た。人生にそれ以上複雑なことは何もなかつた。それは限られた数の定石から成立ち、彼女は隠退した名棋士で、誰にも的確な忠言を與へることのできる立場にゐた。だから當然「時代」を輕蔑してゐた。いくら新らしがつたところで、人が昔からの情熱の法則の例外に立つことができようか？

「このごろの若い人のやつてゐることは」とかづはよく言ふのだつた。「衣裳がちがふだけで、中味はちつとも昔とかはつてゐやしませんよ。若い人は自分にとつてはじめての経験を、世間様にもはじめての経験だとりちがへる。どんな無軌道だつて昔とおなじで、ただ世間のやかましい目が昔ほどぢやないから、無軌道も大がかりになつて、ますます人目につくことをしなくちやならなくなるんです」

これは實に平板で月並な意見だつたが、かづの口から出ると力があつた。

かづは腰掛にかけたまま、袂からとりだした煙草をおいしく喫んだ。朝の光りに漂ふその煙が、

風もないので、羽二重のやうにつややかに重い。この味はひには、家庭を持つた女のきつと知らない、ゆつたりした生活の自負そのものの味があつた。前夜どんなに呑み過しても、健康なかつの體は、かつて煙草を不味く喫んだおぼえがないのである。

ここから見えなくても、庭の全景はかづの心にしつかりと刻み込まれ、隅々までも掌を指すやうに諳んじてゐる。庭の中心をなす黒々とした緑の巨大な薔の樹、その光澤のある厚い小さな葉の聚り、裏山の木々にまつはる山葡萄、……そして書院から見た芝生のひろい展望と正面のつましい雪見燈籠、古い五輪塔を置いた中ノ島の夥しい笹。庭のどんな小さな植込みも、どんな小さな花も、偶然に生じたものではない。

……煙草を喫んでゐるうちに、この庭の精緻な姿が、かづのいろんな記憶をすつかりおほひつくしてしまふのが感じられる。かづは今やこの庭に對するやうに、人間や世間に對してゐる。そればかりではない。彼女はそれを所有してゐるのだつた。